

私の読書日記

アサギマダラ、ベートーヴェン、  
原発のコレスト

作家

池澤夏樹



×月×日

生物の本が好きだ。  
一つの種についての本が  
楽しい。クマムシとかハダ  
カデバネズミとか。

だから『謎の蝶アサギマ  
ダラはなぜ海を渡るの  
か?』(栗田昌裕 P.H.P  
1500円+税)も軽い気  
持ちで手に取った。

十年ばかり沖繩に住んで  
いたからマダラチョウはよ  
く知っている。スジグロカ  
バマダラとオオゴマダラは  
よく見かけた(後者には  
「新聞蝶」という異名があ  
る。新聞紙の切れ端が風に  
舞っているように見えるの  
だ)。しかしリュウキュウ  
アサギマダラを見た覚えが  
ない。気にしていたのだが  
出会えなかった。

このチョウは鳥のように

渡りをする事で知られて  
いる。だから本書はもっぱ  
ら渡りの観察の話。捕らえ  
て、場所と名前と日付けな  
どを翅に書き込み(マーキ  
ングという)、放す。

アサギマダラの生態観察  
はなかなか盛んらしく、マ  
ーキングをする人は他にも  
いるから同じチョウが他の  
地で捕獲されることもあ  
る。互いに情報を交換すれ  
ばチョウの渡りの実態が明  
らかになる。再捕獲率が一  
・四パーセントとかいうの  
は驚くべき数字だ。中には  
福島県の「デコ平」という  
拠点でマークした個体が小  
笠原諸島や台湾で見つかつ  
た例もある。台湾までは二  
千二百三十一キロ。  
それにしても著者が七年  
間で「11万4446頭」の

チョウを捕らえて書き込ん  
で放したというのは尋常な  
努力ではない。チョウに会  
える好条件の日には三百頭  
以上にマークする。

数をこなすことに力を注  
ぐのは統計的に有意な結果  
を得るためだ。同じ場所  
で何日も作業を続けていると  
自分で再捕獲も珍しくなく  
なる。その比率からその地  
域にいるチョウの総数が推  
計できる。

渡り以外のアサギマダラ  
の生態についての話もおも  
しろい。匂いに敏感だから  
チョウに触れた手に他のチ  
ョウが寄ってくる。フェロ  
モンの材料を得るためにあ  
る種のアルカロイドを含む  
草を食べる。このチョウに  
寄生するハエの体内に寄生  
するハチがいるという。

著者の観察は細緻で、ア  
サギマダラの飛びかたを二  
十四に分類するなど、この  
人はどういう目を持ってい  
てどれだけの時間を持って  
フィールドで過ごしたのかと呆れ  
るほどだ。

しかし、こんな話だけな  
らばばくはこの人を卓越し  
たアマチュアとして尊敬す  
るだけで済んだと思う(本  
職は内科医である)。ダー  
ウィンだってメンデルだっ  
てアマチュアだった。

最後のところで話は不思議な方向に向かう。奄美大



『謎の蝶アサギマダラはなぜ海を渡るのか?』

島に近い喜界島でマーキン  
グした個体が三日目に八重  
山諸島の黒島で再捕獲され  
た。実質二日あるかないか  
の間にどうして七百四十五  
キロの移動ができたのか?  
追い風などの記録はない。  
「まるで密室殺人の謎を解  
くようだ。むしろ、データ  
が間違っていると思った方  
が気が楽だ」と著者が考え  
たのは当然だろう。

それまでもこのチョウ  
に関しては不思議なことが  
いくつもあった。北の地で  
放したチョウを南の地で再  
捕獲できるという予感に導  
かれて、実際に見つかる。

著者は医学の前に数学を  
専攻しているから確率には  
くわしい。では、自分が福  
島県で放したチョウに愛知  
県で再会したその同じ場に

いけざわなつき 1945年北海道生まれ。『スティル・ライフ』で芥川賞。  
小説、紀行など著作多数。新刊に『終わり始まり』(朝日新聞出版)など。

もう一頭が到着したことを偶然と言えらるだろうか？他の人が再捕獲したのを持ってきてくれた。それを左手で取ったら、右手に別のチョウが留まった。それも自分がマークした個体だった！

彼が「アサギマダラは確率を超えているのではないか」と考えるのも無理はない。これは神秘主義だ。あるいは現行の科学を超えるもう一つ先の科学か。こういう場合、人の心はどうしても確率を超える何かを想定してしまう。

その先にある著者の仮説はいよいよすごい。アサギマダラの集団には

- ① 大域の気象を読む力
- ② 大域の地形を読む力
- ③ 集団を保つ力と集団毎に交流する能力

があるとと言う。集団が個体のようにふるまう。

これはまったく未知の研究領域ではないのか。

×月×日  
ひがむわけではないが、現代では文学よりは音楽の

方がずっと優勢なようだ。例えばモーツァルトやベートーヴェンが聴かれるように読まれている近代ヨーロッパの作家はいない。マンゾーニの『いいなづけ』を知る者は少ないがヴェルディの『リゴレット』は今も頻繁に上演されている（ぼくは二週間前にミラノ・スカラ座を見たばかりだ）。ヴェルディの「レクイエム」はマンゾーニの死に向けて書かれたのに。

聴くだけなら誰にでもできる。ベートーヴェンの「第九」は年末の賑わいになっっている。

ではどこがあの大曲の魅力なのか？

『第九』誕生——1824年のヨーロッパ（ハーヴェイ・サククス 後藤菜穂子訳 春秋社 2800円＋税）は「第九」を巡るずいぶん大がかりな本でとても



「第九」誕生

おもしろかった。著者はアメリカの音楽学者で、指揮者としての経歴も持っている。博識で文章がうまく構成が見事。

ベートーヴェンの人柄、あの曲が成立した事情、時代と思想の背景、各楽章の（五線譜を使わない）細かな分析……一つ一つが明晰で、暗い部屋に火が点ったようによくわかる。ベートーヴェンは我らの同時代人と思いたくなる。

まず時代。フランス革命で大きく左に振れたヨーロッパはナポレオン戦争を経て王政復古に至る。保守と抑圧の時期が到来する。

キーワードは「ロマン主義」だ。スタンダードは「ロマン主義」とは、ヨーロッパ中で勃発し、やがて自滅した革命の『解放』の原理を崇高化したものと理解した。自由・平等・友愛は一旦は挫折したもののその後の世界の普遍的原理となった。

だが王政復古で自由を求める人々は絶望を味わった。現実の政治はもうどうにも動かない。一九六八年

の五月革命以降の我々と同じ。では理念の世界で理想を求めよう。

そのためにこの本の著者はベートーヴェンと並べてバイロンやプーシキンやハイネを論じる。

ベートーヴェンは音楽家として宮廷から独立し、作曲人ではなく芸術家という新しい社会的ポジションを確立した。人柄は奇矯でも作品はいいという評判を得た。

この重要な点を論証した上で著者は「第九」の解析にかかる。彼は楽音を言語的・視覚的イメージに置き換えない。「曲に対してストーリーを作り上げたり、あるいは逆に、曲があるストーリーをベースにして書かれたものだ」と解釈したりといったことには抵抗があるから抽象のまま扱ったのだ。

で、一楽章ごとの譜面を追った分析に入るのだが、これが曲を聴きながら読むとおもしろい。こういうからくりになっていったのかと感心することしきり。

「（聴く者は）第一楽章の

過酷さと絶望を生き抜き、第二楽章の苦闘に参加し、第三楽章の人生をそのまま受け入れるという姿勢によって純化されたのである。ベートーヴェンは、今度は私たちにすべてを包み込む喜びを体験してほしいのだ」という結論をそのまま自分の耳と心が肯定する。

×月×日  
さて、俗世間に降下しなければならぬ。

今の日本社会の病理の根源に原発がある。地震と津波はそれを露わにしたが、まだ彼ら（電力会社・自民党・産業界）はさきまに詭弁を弄して実態を隠している。その最たるものが原発は安いというウソだ。

経済と財政の専門家である金子勝の『原発は火力より高い』（岩波ブックレット 560円＋税）は原発のコストを分析して、実際には火力よりずっと高くつくことを論証している。専門家ではないぼくは彼の論に納得した上で彼らの反論を待つ。それが出て来ないのなら勝負は決まりだ。

『私の読書日記』は、池澤夏樹、酒井順子、鹿島茂、立花隆の各氏が毎週交代で執筆いたします。